

2019年
8月19日号 No.1533



週刊

教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryo.co.jp>

潮流

「見て見ぬふりをしない」 をモットーに

NPO法人日本ガーディアン・エンジェルス理事長 小田啓二

資料

平成31年度(令和元年度)全国学力・ 学習状況調査の結果(概要)①

文部科学省

CONTENTS

▶ 2 潮流

「見て見ぬふりをしない」をモットーに

小田啓二(NPO法人日本ガーディアン・エンジェルス理事長)

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○給食費徴収などの負担軽減でガイドライン
——文科省

編集部

○初の中学・英語学力調査、要点を捉える力
などに課題

編集部

▶ 8 特別企画

子供の貧困対策の指標、どう見直されるのか?

▶ 12 校長講話

瞬時のワンポイント講話・その⑧

ー校長の思考ポケットを開示ー

野口晃男(前盛岡大学非常勤講師、元岩手県盛岡市立中野小学校校長)

▶ 14 合理的配慮ー現場の対応事例

交流及び共同学習で「合理的配慮」事例集
——石川県小松市⑦

編集部

▶ 16 特別資料

「学校における携帯電話の取扱い等について」
(全連小)ほか

▶ 19 資料

平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況
調査の結果(概要)①

文部科学省

▶ 34 月間教育ファイル

▶ 35 教育の危機管理

中2生徒が校舎4階から転落した事故につき、
町に損害賠償を認めた事例

梅澤秀監(東京女子体育大学・短期大学特任教授)

▶ 38 向山行雄のドキュメント『学校経営』 いよいよ給食改革に挑戦!

向山行雄(敬愛大学国際学部教授・教職センター長、全国連合小学校長会顧問)

▶ 40 玉置崇の新学期指導要領 現場での生かし方 道徳授業はすべてを学級担任任せにしない

玉置 崇(岐阜聖徳学園大学教育学部教授)

▶ 42 変わる教育委員会

国に先駆けて「グローバル・スタディ」

細田真由美(さいたま市教育委員会教育長)

▶ 43 教育問題法律相談

部活動指導員の職務範囲と指導中事故の場合
の共済保険・法的責任

三坂彰彦(弁護士)

▶ 44 通信・議会質疑

不登校対策②

▶ 46 変わる! 英語教育

全国学力・学習状況調査から①

編集部

▶ 48 BOOK

『給食の歴史』

『誰にも負けない努力』

▶ 49 自著を語る

『働き方改革時代の行政の業務改革戦略』

小島卓弥(株NTTデータ経営研究所シニアマネージャー)

▶ 50 特別資料

中教審・教員養成部会「教員養成のフラッグシップ
大学検討ワーキンググループ(第3回)」の主な意見

▶ 52 マイオピニオン

カタカナ語の氾濫は問題だ

貝塚茂樹(武蔵野大学教授)



撮影：浅葉美穂 (Miho Asaba)

潮流

NPO法人日本ガーディアン・エンジェルズ
理事長
小田啓二氏に聞く

「見て見ぬふりをしない」をモットーに

「見て見ぬふりをしない」をモットーに
地域での安全活動に取り組んできた。

パトロールや安全セミナーのほか
ネット安全教育にも取り組んでいる。

ニューヨークで若者たちが活動

1979年にアメリカのニューヨーク市で13人の若者たちが地下鉄のパトロールを始めたのが「ガーディアン・エンジェルズ」誕生の始まり。赤いベレー帽と白いシャツがトレードマークで、ストリートでの非行・犯罪の抑止活動、麻薬撲滅キャンペーンなどの活動が全米に広がり、現在では世界15カ国、約100の都市で活動する国際規模の防犯団体となった。その東京支部として1995年に日本でも活動が始まり、防犯パトロールや子どもの安全セミナーなど、市民による自主的な防犯活動の広がりにつながった。1999年にNPO法人となり、安全で住みよいまちづくりの推進に寄与する幅広い活動を進めてきた。

小田 1995年は1月に阪神・淡路大震災があり3月には地下鉄サリン事件が起こるなど、安全についての不安が大きな社会問題となった年です。また1997年には神戸連続児童殺傷事件が起こりました。この事件を受けて、危機感を持った小学校のPTAから防犯パトロールの依頼があり、役員などが入れ替わってもパトロールが継続できるように、学区内の危険箇所やゴミなどで汚れた場所、暗い道などを地図にしていって安全マップづく

りの活動が始まりました。また2000年からは、やはりPTAからの依頼で「子ども安全セミナー」が始まりました。これは、児童が1人で登下校する場合に、自分でできる危機管理方法を学ぶものです。

ニューヨーク市で始まった若者たちの活動では、「Dare to Care」(「あえて気にかける」「見て見ぬふりをしない」)をモットーにしてきたという。また、子どもや保護者を対象としたセーフティ教室などを文部科学省や教育委員会などが支援する動きが広がる中で、防犯だけではなく、非行予防や薬物乱用防止、インターネットの安全利用、いじめ問題など、幅広い問題に、市民団体としてセミナーなどの講師派遣などで役割を果たしてきた。なお、2010年から2015年にかけて、文部科学省から委嘱を受けて、小中学校の「学校安全教室」(子ども・女子児童生徒の防犯対策、いじめ対策、薬物乱用防止など)の教材開発と全国各地での実践事例を報告書にまとめている。

小田 国が違えば安全についての考え方も異なります。ニューヨークでの活動で現地の学校を訪問すると、スクールバスが完備されており、入り口にはスクールポリスがいいて、金属探知器まで置かれていました。日本でも安全のために必要な

ハードウェアの整備を期待したいのですが、私たちは「見て見ぬふりをしない」というコミュニケーションの共存の意識や、普段から安全への意識を高めておくなど、ソフト面での安全教育の部分が大切だと思っています。

平時の危機意識に課題

ニューヨーク市の治安を改善していくきっかけになった考えに、アメリカの犯罪学者ジョージ・ケリングの「割れ窓理論」がある。1枚だけ窓ガラスが割れていても放置しておく、誰も注目していないことの象徴となり、周りの窓ガラスも割られてしまう。犯罪も、ささいな秩序違反のうちに徹底的に対応することが、将来の凶悪な犯罪を抑止していく力になるというものだ。ニューヨーク市では、まず落書きを消したり、ゴミを拾う活動を青年たちが始め、警察も軽微な犯罪でもしっかり取り締まるようになり、治安の改善につながった。

小田 この「割れ窓理論」は、アメリカだけではなく、日本も含めて世界で通用する考えです。つまり、悪くなる前の「予兆」に気づく力を身に付けることが大切で、非行など言えば、子どもの髪型や服装が乱れるなどのサインに保護者や教師が気づいて、すぐに改善するため

の手を打っていくという考え方です。私たちの活動は、こうした理論を「安全」という切り口で活用しているわけです。ですから、「私には関係ない」というのではなく、「私にもできる何かがあるはず」という姿勢で関わっていくことが大切なのです。

同NPOが学校などで実施する防犯についてセミナーでは、例えば防犯ブザーは「1人になった時は手に持ってすぐに使える状態にする」ことを指導している。このように周囲に注意を払うという意識の「スイッチをオン」にすることで、危険性もそれだけ低くなるからだ。最近、増えている「歩きスマホ」や「イヤフォンで周囲の音がよく聴こえない」状態は、自分の周囲に注意を払うことは逆行しており、防犯だけでなく、交通安全の面からも問題がある。小田 安全教育のお手伝いで、よく学校を訪問する機会がありますが、その学校のトイレを見るようにしています。トイレが汚い学校は、生徒も乱れがちなことが多いです。逆に、トイレがきれいで、廊下を歩いても生徒たちが挨拶をしてくれるような学校は、いろいろな面できちんとしていることが多いですね。同NPOが作成している子ども向けのパンフレットには、「もしものことがあった



校外学習などでおそろいのベストを着用しているイギリスの子どもの例

らどうしよう」という意識を持つことで、前もって危険を感じることができるようになることが分かりやすくまとめられている。特に、「ふだん見慣れない人を見つめる」「目」、後ろから近づく音を感じる「耳」、大声で危険をはっきりと人に伝える「声」、知らない人に近づきすぎない「腕」、危ないと思ったらすぐに逃げ出す「足」の力の大切さや、「安全パワー」を身に付けるチェックリストなどもまとめており、「自分の身は自分で守る」ためのポイントが分かるようになっている。こうした教材も学校での

安全教育に活用できそうだ。

子どもにもベストを着せる運動を

地域でのパトロール活動のほかに、学校でのセミナーや講演なども最近、増えてきているという。このうち、PTAや教職員ではなく、児童・生徒・学生などを対象とした子ども安全セミナーやインターネット安全教室、薬物乱用防止教室、女性対象の防犯教室、その他の講演などは、ここ数年に、全国で40〜50箇所近くで実施してきたという。

このうち、ネット安全教育は、アメリカでは1995年から開始され、日本では、1999年からIT企業の協力を得て、「インターネット安全教室」を全国の小学校で始めた。この安全教育用のプログラムはネット関連企業が作成し、ソフト作成に当たって慶應義塾大学の支援も得られたという。

小田 安全活動にはハード面とソフト面の両方の対策が必要ですが、最終的には個々人の危機意識を高めることが目標になってきます。もちろん、地域全体での意識を高めるために、PTAの皆さんや商店街の皆さんと一緒に、その地域の安全パトロールなども行っています。最近では、子どもの登下校など

で、地域の方が緑色や黄色の腕章やベストを身に付けて、見守っている姿を見る機会も増えてきました。また、自治体によつてはGPSを内蔵した機器を子どもたちに持たせており、トラブル時には、その位置を特定して、近隣の自治会関係者も含めて駆けつけるようなシステムもあります。

しかし、莫大な費用をかけなくても、有効な手立てになり得るのは、大人の側ではなくて、子どもが緑や黄色のベストを身に付けて登下校することではないでしょうか。交通安全上も車を運転する人が視認しやすいですし、子どもも安全を意識しやすくなります。そして、そのようなベストを身に付けている子どもたちを地域ぐるみで守るという環境を作ることです。諸外国では、校外学習に揃いの帽子やTシャツを着用するなどの工夫をしているケースもあります。日本では子どもを見守る大人の側がベストなどを身に付けていますが、発想を逆転して、子どもたちが登下校時に着用することで、周りの大人も子どもたちにも、安全への意識付けが強まるのではないのでしょうか。NPO法人日本ガーディアン・エンジェルズ <http://www.guardianangels.or.jp>